慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ナップに言及せる福澤書翰
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.1 (1956. 5) ,p.103- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560500-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

しかも、それが明治十七年六月のことで、日本人で同校の學科を卒業した最初のものであると。

また、右の原田と相前後して、やはり塾出身の岩崎清七が明治十八年六月同大學に入學し、二年間在學して普通大學課及び政治經濟を學んでいるし、さらに原田と同年の明治二十年にはこれも塾出身の成瀬正恭が同じ法科に入つたといわれ、原田の入學とこれらとの關連についてはいまのところはつきりしないけれども、とにかく同大學と義塾との因緣また淺からぬものあるをうかがい得よう。そればかりか、前掲書翰の一に、福澤は

コルネル大學なれば其土地柄と申し學校の風と申し入費の一點は頗る都合宜しく云々（同書、七九八頁）

といい、多少は勸誘のための修飾はあつたにもせよ、福澤が同校を一應はかつていたことも明らかであろう。

なお、原田敬吾ははじめ同じニューヨーク州で英文學を學び、後思うところあつてコーネルに入つたと傳えられ、明治二十二年同大學を卒業して歸朝し、一時は義塾普通部の授業を囑託されたこともあるが、概ね辯護士として活躍した。出身は秋田縣、舊佐竹藩士で大審院判事をした原田種德の長男にあたる人である。入塾は明治十四年一月十三日、義塾では安富衆輔、石河幹明等と同窓であつた。その義塾を出た直後は、三田演說會正員の一人として、同演說會の講壇にしばしば立つてもいる。（會田倉吉）

ナップに言及せる福澤書翰

「續福澤全集」第六卷（書翰集）をみると、わが國に渡來した最初のユニテリアン宣教師アーサー・メイ・ナップ（Arthur May Knapp）に言及した福澤諭吉の書翰が左の九通收錄されている。

一八一　濱野定四郎宛　年未詳一月十四日付
七〇四　益田英次宛　明治二十二年九月二十六日付
七九四　福澤英之助宛　明治二十三年？一月十四日付
八〇五　福澤捨次郎宛　明治二十年十二月十九日付
八一五　福澤捨次郎宛　明治二十二年十月二十五日付
八四六　小泉信吉宛　明治二十二年三月一日付
八四七　小泉信吉宛　明治二十二年四月十二日付
八四八　小泉信吉宛　明治二十二年九月三日付
一〇八三　日原昌造宛　明治二十二年三月十日付

このうち、七〇四・八〇五・八一五・八四六・八四七・八四八の六通については、既に拙稿「宣教師ナップと福澤諭吉」（本誌、第二七卷、第二・三號所收）のなかで述べておいたから、敢えて繰返えす必要もあるまいが、他の三通は「年未詳」のものなど一應推定も出來そうなので、特にここに一言してみよう。

まず、最後の一〇八三日原昌造宛書翰は、明治二十二年五月三日ナップが一旦日本を立つて、ボストンでのユニテリアン第六十

四回大會に臨む約二ケ月ほど前のもので、ナップに賴み、慶應義塾の外國教師雇入れの件をハーバート校に談ずる積りだ、などといい送つている。また、最初の一八一とそれから三番目の七九四とは共にナップ及びアメリカから着任した教師等に對する晩食の招待に關するもので、前者では濱野定四郎にも出席方を案内し、後者では當時福澤英之助にあずけてあつた福澤の四男大四郎を、これまた同席させたいから十六日か、七日のうちにおかえし願いたいといつた文面である。しかも、日附は兩者同じの一月十四日、招待の日もまた同じ十七日で一致する。したがつて、前者に「年未詳」、後者には「明治二十三年？」と記してあるのは、思うに、むしろ同じときのことといえるのではあるまいか。そして、義塾がナップを煩わしアメリカから聘した教師としてはリスカム、ドロッパース、ウイグモアーの三名があり、かれらはそろつて明治二十三年一月の就任である。即ち、ナップと一緒に福澤が晩食に招いた新來の米人教師といえば、おそらくこの三名ならんと考えられるから、そうすれば右は明治二十三年のことと推定してほぼ差支えなく、前者の「年未詳」も大體同じくこのときのことと類推して間違いはないであろう。

なお、この他、ナップに言及した福澤書翰は「愛兒への手紙」に十二通あり、いずれもやはり前記の拙稿に既述したところであるが、その後別に同じくナップにいい及んだ福澤桃介宛書翰寫さらに二通と、寺田福壽宛書翰寫一通とを見出した。明治二十二年五月のナップの歸國にふれたものや、日常の頻繁な往來ぶりやがしのばれるのが興味深いし、前掲拙稿の補足にもなろうから、以下そのナップに關する部分だけでも拔書き、紹介してみよう。この寫本は義塾圖書館に藏するものである。

一、明治二十二年二月二十日附、福澤桃介宛

ミストルナップは三（五）月三日出發歸國九月には再渡之積り同氏の何事は先つ上出來の方なり　本塾の學事改良に付第一の要は教師の事にして今回ナップ氏歸國こそ幸なれ一切同氏に托して雇入の事に内談整候爾後慶應義塾の大學部は米國風に可相成度候

二、明治三（二）十二年五月二日附、同宛

ナップ一家幷ニシモンズ老婦人其外同國人七八名之同伴にて明日出發致候

三、年未詳九月十六日附、寺田福壽宛

ナップ氏より御遣し之書是れは翻譯之上相渡し可申仝氏は今日光に在り不日歸京の義につき其時之事に可致歸京さへ致候得ば拙宅へ日毎に往來致候間何事ニても相談は出來可申候

ただし、右の寫も一の「三月三日出發云々」は他との比較から「五月三日出發」の誤りと考えられるし、二の發信日附「明治三十二年五月二日」は明らかに「明治二十二年五月二日」でなけれ

ばなるまい。それとも、「三月三日出發云々」の件は當初にはそんな豫定でもあつたというのであろうか。（會田倉吉）

カロザスに言及せる或る福澤書翰について

「續福澤全集」第六卷（四一五――七頁）に收められている明治六年七月二十日附の中上川彦次郎宛福澤書翰（五二三）をみると、文中

塾も相替事無之カロザさんも七月初にて止めに相成代りの人を詮索いたし居候當九月よりは變則に少しく力を增し候樣致度積りなり（四一六頁）

と記した個所がある。「カロザさん」とは明治五年六月慶應義塾がはじめて外人教師を雇入れた、その最初の人卽ちChristopher carrothers をさす。そのことはまず間違いなかろうと思われるが、このカロザスの雇入れ契約書（「慶應義塾五十年史」一三〇――二頁、「慶應義塾七十五年史」八二頁等掲載、また義塾圖書館にはその寫本を藏す。）に書いてある契約期間は明治五年六月朔日より同年十一月二十九日まで六ケ月となつているので、おそらくその後雇いつがれて翌年七月に及んだものと察せられる。

ところが、ここで問題になるのは、實はこれと同じ書翰が「中上川彦次郎先生傳」（昭一四、一〇、二九、刊）（六〇一――四頁）に載つていて、それには右と同じ部分を

塾も相替事無之、カロザさんも、七月切に而止めに相成、代りの人を詮索いたし居候。尙九月よりは、變則にかたく力を增し候樣、致度積りなり。（六〇二頁）

とあり、「七月初」と「七月切」とのひらきが存する。では、いずれが正しいのかというと、どうもそれは原本の所在が不明なままに、結局どちらともきめかねていた。ただ、兩者を比較檢討してみるのに、「當九月」と「尙九月」とでは書翰の日附から推してどうやら後者をとりたいし、「少しく力を增し」と「かたく力を增し」とでは、なんとなくこれは前者に部がありそうな氣がするというに過ぎない。

そこへ、恰度、このたび淸岡暎一氏を通じ、右の書翰の原本は酒井良明の所藏にかかり、現に酒井利雄氏のもとに存することがわかつて、過日（昭和三十一年一月二十三日）それを拜見する機會を得、これらの疑問の一切を氷解した。つまり、原本ではそれぞれ「七月切」、「尙九月」、「少しく力を增し」等とみられるのである。それにつけても、同じ原本に據つた筈のこんな書翰一つにでも、このような出入りの生ずることを思えば、本當に眞をつたえ、またそれをつかむのは何事によらずなかなか容易ならぬことだと考えさせられるではないか。殊に、前記中上川傳の普及版